

大衆文学五十年

尾崎
秀樹
談社

大衆文学五十年

昭和四十四年十月三十日 第一刷発行

著 者 尾崎秀樹

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話東京（九四三）一一一一（大代表）／振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

定価 七二〇円



©尾崎秀樹 昭和四十四年 落丁本・乱丁本は、おとりかえいたしません。

Printed in Japan

大眾文學五十年 ■ 目次

序章 大衆文学の変遷——マスメディアとの関連 7

一章 大衆文学への歩み 25

開拓者たち ゾルゲ事件と私 尾崎秀実と牧野吉晴 熱血漢・牧野吉晴
《小説会議》に参加 《近代説話》創刊 《大衆文学研究》発行
「二十一日会」の誕生

二章 時代小説の系譜 44

中里介山と「峠」 殺しの美学 続殺しの美学 『盤嶽』の系譜
ヒーロー像の発展 野村胡堂と捕物帖 林不忘の反骨 丹下左膳の変容
作家と筆名 鞍馬天狗の抵抗

三章 統時代小説の系譜 71

吉川文学の魅力 姿三四郎のモデル 覆面の山本周五郎
足軽精神の作家——海音寺潮五郎 直木三十五の評判 直木三十五と鷺尾雨工
現代の「語りべ」川口松太郎

四章 大衆作家の素顔 96

「侍ニッポン」のモダニズム 芸への憧憬——小島政二郎 「險の母」との再会
アウトローへの共感——子母沢寛 勝蔵と竹の島人の因縁 大衆の詩「都々逸」
「退屈男」の反骨 三上於菟吉の筆力 病紳士・国枝史郎 下村悦夫
角田喜久雄 山田風太郎 南条範夫 八切止夫

五章 新鷹会の作家たち 139

土師清二 山岡莊八 村上元三 田岡典夫 戸川幸夫 池波正太郎

六章 実録情話作家たち 158

松崎天民 田中貢太郎 村松梢風 山中峯太郎 山中峯太郎の変名

七章 大衆文学の多様性 172

半七の戸籍 捕物帳の特色 異色の捕物帳 短い短い作品 コント作家
大河小説 佐々木邦 ユーモアクラブ サラリーマンもの

八章 推理小説の余白に 196

作家と職業遍歴 岩田準一のさし絵 久山秀子のナゾ 明智小五郎 甲賀三郎
「支倉事件」のモデル タナトプシス 正木不如丘 海野十三の終戦日記
夢野久作

九章 同世代の作家たち 225

司馬遼太郎の世界 陳舜臣 寺内大吉 伊藤桂一 永井路子 杉本苑子
水上勉 黒岩重吾

終章 大衆文学の二つの顔 244

大眾文學五十年

装
幀
原
弘

序章 大衆文学の変遷——マス・メディアとの関連

大衆文学はもともと大量消費を目的として生産される商品的な性格をそなえている。というより、大量生産、大量伝達、大量消費の条件をぬぎにしては、マスコミ時代の大衆文学は語れない。ましてや、新しいメディアの登場が、プラスとマイナスの両側面から、大衆文学をどう規制してきたか、規制というのは当然にしても、ともかくどう影響し、されて今日に到ったか——この問題は、大衆文学のマスコミ的性格をさぐる上でも重要な課題であろう。しかし活字の文化史が定本をもたず、マスコミ史が統計的に不備であるため、十全を期すことは不可能だ。せめていくつかの問題点だけでもチェックしておきたい。

大衆文学はある日、忽然として誕生したわけではない。それに先行するいくつかの先駆的形態をふまえている。とくに大衆時代ものは講談・人情噺・歌舞伎・祭文・あるいは近世庶民文芸な

どに材をおおぎ、近くは洪柿園（ひゅうしえん）や碧瑠璃園の歴史もの、浪六の撥鬚（はつじん）小説などの流れをくみ、欧米の伝奇小説を換骨奪胎した上に、日本的な花を咲かせた。

その意味では口誦文芸のむかしからたどり直す必要がある。しかしここでは明治以後の大衆的な文芸（大正末期に成立した狭義の大衆文芸をふくめて）が、新メディアの誕生と、活字面における技術革新によってどのような変貌を可能にしたかを考えてみたい。

その変貌過程を語る際に、見おとせない曲折点をマスコミ史的な側面からひろいあげてみると、新聞小説の誕生、話芸の速記本への移行、書き講談の成立、その企業化、印刷技術革新に支えられた日刊紙の百万部突破、週刊誌の出現、国民雑誌《キング》創刊、読む雑誌から見る雑誌への転換などであり、それが大衆文化のそれぞれの局面、つまり寄席の変貌、貸本文化の消長、活動写真からトーキー映画への躍進、音盤の普及、ラジオ・テレビの発達などに密接な関連をもっているあたりに、純文学とメディアの変遷を考える場合以上の問題性がふくまれる。さらにこまかく論じるとすれば、明治家庭小説と新派、紙芝居から児童マンガへ到る視覚的媒体と大衆文学、テープと大衆小説（例えば山岡荘八『徳川家康』の場合）、大衆演芸と大衆小説などの個々のケースまで論及することが必要だろう。そうすることによって、はじめて大衆文学の商品的側面が（同時に大衆文学が大衆文化の活字的な一環であることの意味が）理解される。大衆文学史が、作品史だけでは片付かないヤッカイなテーマであることは、こういったワイド的操作を必要とすることひとつとして考えても容易に察知されよう。

新聞小説の誕生

長谷川如是閑に、新聞それ自体を一つの文学形態と見なすユニークなエッセイがある。彼は書いている。

「……日本の新聞は最初はニュース本位の新聞的本質をもつて起つたが、封建文学者の残党が新聞に転向して以来、ジャーナリズムは、常に文学と結びついて進んだのであった。殊に日本の近代文学は、新聞雑誌の発達以来、その発表は概ね新聞雑誌により、欧米に於けるように単行本本位ではなかった。後には数百回に亙る長篇が新聞雑誌——殊に新聞——によって発表された。かかる慣習の発生と共に新聞紙も亦、時代の一流の文学者殊に小説家を社員として招聘し、専属にその新聞にのみ執筆させる方法をとつた。……その結果、日本では、殊にジャーナリズムに適しない文学の方面、たとえば全くのアカデミック・サークルを対象とした、学問的形態の文学とか、知識階級の極めて少ない部分を対象としたある種の文芸とかを除けば、日本の近代文学の主流は、ジャーナリズムに於てその表現をとつたといつていいのである。その意味での新聞文学は、畢竟日本の近代文学そのものに外ならないのである」

日本の近代文学が、単行本本位でなく新聞雑誌本位に発表されてきたことは、文学の大衆性・時事性の面からいっても重要なポイントになる。とくに大衆文学史を語る際には見のがせない条件だ。

新聞小説は明治初年の、いわゆる「小新聞」を中心に発生した。「小新聞」というのは、論説中心の「大新聞」と対比される名称で、全文五号活字総ルビ（但し相場欄と広告を除く）つき、

勸善懲惡をモットーに、啓蒙を目的として刊行された。明治変革後しばらくは実学偏重の気運が強く、娯楽的なものは軽視されがちであったが、民心が安定するにつれて、婦女子を対象とした啓蒙的な雑報紙が要求されるのは当然であった。この書き手には、維新後零落し生活の資にも事欠いていた戯作者一派が動員される。しかし彼らはいずれも封建時代の文学の方法と意識しかもたず、野崎左文の言葉を借りれば、それは「単に筆を執る職掌の戯作者が生活上同じく筆を執る新聞記者に転職した」だけのものであった。花柳界の艶ダネや市井の情事に外形だけの時世相をほどこしたそれらの記事は、しかし何かを待ち望んでいた大衆にうけた。明治七年十一月に発刊された読売新聞は百数十部から一年たたぬうちに一万部を突破するほどの躍進ぶりをしめた。

（明治八年十二月二十九日付社告には部数一万七千とある）。明治八年には「平仮名絵入」（のちに「東京絵入」と改題）、「仮名読」が創刊、大阪では「浪花新聞」がこれにつづいた（明治八年度の新聞・雑誌数五三種）。明治九年になると、服部撫松の週刊誌《東京新誌》が登場し、これを皮切りに成島柳北の《花月新誌》、仮名垣魯文の《魯文珍報》、高島藍泉の《芳譚雜誌》などが年ごとに週刊・半月刊・旬刊諸誌の戦列に加わる（同年の新聞雑誌総数一七〇種）。そして「読売」を舞台にする高島藍泉（三世種彦）「平仮名絵入」の前田夏繁、染崎延房（二世春水）、「仮名読」の魯文などが精力的に活躍した。

大衆読者は戯作文学がかつてもっていた娯楽性を、新聞、とくに小新聞の雑報に求め、その要求は次第と形をなして、「つづき物」ひいては「連載読物」の登場を促すことになった。明治八

年十一月末に三日にわたって「平仮名絵入」に掲載された実録『岩田八十八の話』は、その中間的な型をしめした。さらに明治十年に「仮名読」に発表された久保田彦作『鳥追いお松の伝』、明治十一年「東京絵入」に連載された作者不詳（前田夏繁といい、また染崎延房だともいわれる）の『金之助の話』などを経て新聞小説の祖型がきずかれた。戯作家の雑報から出発しただけに、それが持つ時局性と娯楽性の二つの要素は、今日に到るまで、大衆性と風俗性の問題として新聞小説の二大与件をなしてきたといっている。さらに総ルビ・挿絵入りのスタイルはながく大衆小説の形態を形づくってきた。

「三条の教憲」以来封建的な勸懲思想を明治教学思想でぬりかえ、そのお先棒をかついてきた彼らの作品は、明治十年代の後半に入ると、次第に底の浅さを露呈し、マンネリズムに陥って、大衆の共感と呼べなくなる。その間隙を埋めたのは、泥棒伯円や三遊亭円朝の講談、人情噺の速記だった。

速記本の出現

円朝は古典落語を集大成しただけでなくて新時代へ話芸の伝統を架橋した。その点は二代目の伯円の場合も同様である。

白浪ものを得意とした伯円は「三条の教憲」が出たのちに、早速実録もの（新聞ダネの雑報や社会記事）を手がけ、「演史家の伯円」「新聞講談の伯円」といわれ、明治十八年には若林柑蔵の手で「安政三組盃」を速記にとらせるほどの開明ぶりを見せた。八つ年下の円朝はこの伯円に多くの面で学んでいる。明治四年ごろすでに『コロンブス伝』や『世界一周オチリヤ双紙』などの

作品を演じた伯円は、「報知新聞」からもつばら取材した。そのためか彼のパトロンには報知系の文士連が少くない。それに反して円朝は「朝野新聞」などから材をとらえたといわれるが正確でない。彼が『牡丹燈籠』を速記本にまとめたのは、伯円より一年早い。明治十五・六年ごろ寄席に対する統制が厳しくなった関係もあって、芸能の世界はやや振わなかった。彼が進んで速記に応じたのは、一つにはその打開策ということもあったのであろうか。

保守的な芸能人なら、嘶を速記に移しとられれば、寄席への客足が減少すると心配するところだが、円朝は逆に速記本という新しい媒体に積極的な欲求を燃やした。それは彼がかつて道具がかりの芝居嘶をはじめたことやその芝居嘶を明治改元後ピツタリとあきらめ素ばなしに転じたこととも、関連する。つねにその時代の民衆とともに成長し、コミュニケーションの方法に新しい創意を加えることを怠らなかつた円朝にしてはじめて可能な行動だ。

田鎖綱紀が日本傍聴筆記法を発表し、その講習会を開いたのは明治十五年。六カ月の養成で三十名ばかりの第一回卒業生が巣立った。田鎖が速記術の普及に乗り出した目的は、帝国議会の開設にあった。明治十三年に国会開設の詔勅が出ると彼の活動は活潑化した。円朝や、伯円の速記に従った若林珪蔵はこの田鎖の開いた講習会の卒業生である。若林は卒業後も牧師や僧侶の説教を速記にとったり、民権壮士の演舌を写したりして修練をおこたらなかつたが、一応の自信がつくとみずから速記法研究会を開いた。しかし一般は速記術がなんであるか知らない。そこで速記術のPRを兼ねて、円朝など知名の話芸家のはなしを速記にとり、これを出版することを思いた

った。同窓の酒井昇造を説得し、人形町の末広や池の端の吹抜亭へ通って円朝の芸をうつした。これが明治十七年七月に東京稗史出版社から刊行された『怪談牡丹燈籠』である。

若林はつづいて『塩原多助一代記』『業平文治漂流奇談』『英国孝子之伝』を手がけ、『塩原多助』は、その当時だけで約十二万部を売りつくしたという。また明治十九年秋に創刊された「やまと新聞」には、條野探菊とのよしみで、『松の操美人の生埋』を連載、つづいて『蝦夷錦古郷家土産』（つぎにうたうおぎえのひとふし）『月謡狄江一節』（おくれざきはるなのうめが）『敵討札所靈驗』（以上小柳英太郎速記）、あるいは『操競女学校』（みさおくらべおんながっこう）『復讐粟田名剣』（おくれざきはるなのうめが）『後開榛名梅ヶ香』（以上酒井昇造）など多くの作品を発表した。「やまと新聞」に掲載したものは、ほかに『文七文結』（もつと）『霧隠伊香保湯煙』『菊模様皿山奇談』などもふくまれてゐる。これらの諸作は「やまと新聞」の売れ行きを高めるのに役立った。興津要はこの時期の円朝にふれて、「たんなる芸人というよりも大衆作家に近い存在だった」と書いていたが、彼のなかには日本文学が近世から近代へ移りかわるさいに、ふり捨てられた庶民的な文学伝統が強く脈打っていたのだ。二葉亭が言文一致に形式的に学びながら、見すごしたもの、それは文学の大衆的伝統だったともいえる。彼の作品には末期戯作家にはない大衆の構想力がうずいていた。円朝らによる講談・人情噺の速記が話題をあつめていた明治二十年前後、速記専門のメディア「百花園」も創刊される。一方「大新聞」は、政治小説へ傾くが、時代が相対的な安定期に入ると、それもうとまれ次第と「小新聞」との間を隔っていた特殊性が薄れてゆく。このことは「小新聞」のなかに「大新聞」の杜説欄に相当する欄を新たに設け、政治や社会を批判するものがあらわれ

たことと対応する現象で、論説中心の新聞と、雑報中心の新聞は、それぞれ他の特色をとり入れて、次第と歩み寄る。連載小説に朝刊用の質の高い作品と、夕刊用の通俗的なものが併置されるようになるのも、読者層の増大にともなう必然の結果であった。

「読売」には紅葉を総帥とする硯友社一党が居すわり、「東西朝日」には根岸派の饗庭篁村や須藤南翠あるいは半井桃水、渡辺霞亭らがかまえ、「大毎東日」には、福地桜痴、岡本綺堂、田口掬汀、菊池幽芳、「報知」には森田思軒門下の村井弦斎、村上浪六、あるいは小杉天外や佐藤紅緑が拠って、次々と代表的な作品を発表する。尾崎紅葉の『金色夜叉』は、誤解をおそれずに表現すれば、この「大新聞」と「小新聞」の融合の上に結晶した大長篇だったともいえようか。

明治二十年代から三十年代へかけて発表された塚原洪柿園・碧瑠璃園・浪六・弦斎・紅葉らの歴史小説・撥鬢小説・家庭小説は、戯作の系譜からではなく、明治新文学の洗礼をうけた世代によって培われた。国運隆盛の気運に投じてのしあがった博文館や、新聞を中心とした家庭小説の出現については、別にふれることにしたい。

書き講談および「キング」創刊

日露戦争になると速記本は貸本屋へ追いやられ、それに替って書き講談が登場する。その典型は明治末期にあらわれた立川文庫だ。速記者を媒介とせずに、いきなり書き下してゆく筆法である。立川文庫はそれを集団創作で行ったところに成立の特異性があつた。完全なメディアおよび技術上の革新だ。それを講談社が企業化する。